講演　広島県同和教育研究協議会研究大会　2001.9.2

近代と都市部落―広島市Ｆ町を事例として

青木　秀男

おはようございます。青木です。日曜日の朝、しかも雨のなか、皆さんには、勉強、ご苦労さまです。心から敬意を表したいと思います。

今日は講演というより、勉強会というようなつもりで、少し話をさせていただきたいと思います。演題は、わたしが日頃関わっております、広島市内の被差別部落での勉強について、お願いしたいということでした。それで、勉強しておりますことの一端を紹介させていただくことで、部落差別の問題および人権の問題の今日に至る歴史的な経緯というか、背景というか、少しでも皆さんの勉強の参考にしていただけるならうれしいな、と思っております。

今日は、広島市内の被差別部落、ここではＦ部落と呼んでおきますけれども、市内の西部にある大きな地区なのですが、その地区のことを話させていただきます。いま、わたしたちは、その地区で、月に一度のペースで、解放運動をやっておられる方たちと勉強会をしております。その勉強会の目的といいますのは、いくつかの理由があって、ぜひその地区についての資料集を出したいということで、いま、準備を兼ねて勉強会をしているところであります。

今日は、Ｆ町の、明治期から戦後期におよぶ、つまり、近代から現代にかけての通史的な話、なかでも戦前期が中心になるとは思いますが、そのような話をさせていただきたいと思います。その場合、わたしは、Ｆ町の、とくに戦前期にみる差別、差別されるということ、さらにはその差別と闘うということといいますか、そうした歴史をみるなかで、今日の部落差別をめぐるさまざまな問題のいわば原点を知ることができる、そのように歴史というものの真実をイメージしております。

部落差別を中心とする人権問題をめぐる今日の政治的、社会的な状況のなかで、残念ながら、わたしの身近な体験からしましても、部落差別というものがなお根強く進行しているということを痛感いたしております。そういう今日の状況を考えるとき、一つは、明治

期以降の、近代の部落差別をめぐる経緯がどうであったかを学ぶことは、今なればこそ、大きな意味があることではないかと思っております。

もう一つは、ご存知の方が多いことと思いますが、現在、関西を中心にして、全国的に被差別部落および部落差別の起源の理解をめぐる論争が、盛んに繰り広げられております。広島市内の大きな書店に行っても、人権・部落問題のコーナーには、そのような論争本がたくさん並んでおります。

その論争は、中心は、被差別部落の起源がいつだったかということをめぐって行われております。これまで、近世政治起源説というものがあったわけですけれども、その説に対していろんな批判が出されております。今日はそういう話の場ではないので、わたしの意見は申しませんが、残念ながら、論争の大きな傾向として、関西を中心として、学者さんたち、および解放運動関係の方たちの議論は、今日の被差別部落の本当の起源というものを、どちらかといえば、あいまいにするような方向に進んでいるような気がしてならないわけです。

いま、いいましたように、わたしの感想の中身については、今日は割愛させていただきます。ただ今日の話に関わって、一点だけ、起源論争に触れておきたいと思います。

わたしは、被差別部落の歴史的な起源というのは、江戸時代、つまり幕藩体制期の初期に求められるというふうには考えております。しかし、江戸期を通じて存続し、強化された、いわば「部落差別」と、明治期以降の、近代社会における部落差別をどのような関係において理解すればいいのか、つまり、前近代の差別が近代にどのように残存し、組み替えられ、新たな機能をもって近代の差別として持続していったのか、そのことについての議論があまりみられません。わたしは、前近代の差別と近代の差別を、たんに「残存」というように直結して捉えることはできない、そういうふうに思っております。今日の部落差別を考える場合は、近代の部落差別に貫く固有の歴史的構造はなにかということが追究されなければならない、その前提にこそ、前近代の「部落差別」の研究が位置づくのだ、わたしは、こんなふうに思っております。

今日の話は、そういう意味で、前近代からは直接演繹できない、近代の差別の構造を考えてみたいということで、その事例として、この広島の被差別部落を挙げたいということであります。そして、近代の部落差別が、どのように社会的な機能を転化しながら、さらに現代または戦後期まで存続するに至ったのかということを、考えてみたいと思います。

話の展開次第で、うまくいくかどうか分かりませんけれども。

さて、本題に入ります。『藝藩通史』という昔の書誌があります。そのなかに、江戸時代の広島に、被差別部落が二つあったと、つまり、当時の広島の東部と西部に位置していたと書かれております。今日話をします被差別部落は、この西部に位置づいた部落、つまり、当時の街道筋の、城下への西の入り口に位置づいた部落なわけであります。

その意味で、Ｆ部落は、近世につくられた被差別部落ということになります。しかし、これから話しますように、Ｆ町の形成なり、地区の経済・社会構造なりをみますと、わたしは、Ｆ町は、ほとんど近代の都市部落といっていいような経緯にあった、いまもあるとみております。

広島県内で、近世に起源をもたず、まったく近代に入って形成された被差別部落があることを、聞いております。Ｆ町は、本当の起源は近世にありますけれども、実質的には、そのような近代部落と同じであると考えていいと思います。

そこで、Ｆ町の歴史に関わって、近代の都市部落というものについて、二つの特徴を指摘しておきたいと思います。一つは、明治期以降、それから大正期、昭和期、そして一九四五年に原爆が落ちる直前に至るあいだに、Ｆ町の人口がどんどん増大していったという事実であります。これは、広島が近代都市として形成され、膨張していく過程で、広島市の近郊からたくさんの人たちが流入してきたという事情に対応しております。つまり、被差別部落の話でいいますと、広島近郊の部落からＦ町に多くの人たちが流入してきたという事実であります。もちろん、Ｆ町に流入した人のすべてが、近郊の被差別部落から来た人ということではないと思います。あれこれの文献や史料、それからＦ町でのわたしたちの聞き取りなどを含めて、農村・漁村と都市の部落のあいだに、大量の人口移動があったことは、もう間違いない事実のようです。

Ｆ町の人口は、近代に入っていちばん古い数字でいいますと、一八七一年に八八九人というのがあります。これが、原爆が落ちる直前、つまり、一九四五年には、六〇三七人となっています。ということは、Ｆ町の人口は、明治期から昭和の前半期のあいだに、六～七倍も膨れ上がったということです。

これは、近代の都市部落の、全国的にみられる特徴であります。大阪なんかでは、さらに規模が大きくて、今日では万を超す人口を抱える被差別部落がいくつもあるという実態

であります。規模の大きさはともかく、Ｆ町も、これらの都市部落の形成の一例をなすわけであります。

近代の都市部落ということのもう一つの特徴は、そこに住んでいる人たちの出自、つまり、家系の四代まで、いや三代前でさえ、よく分からない、先祖がどこから来た人であるかも、かならずしも定かでないという人が多い、もしくは少なくないということであります。Ｆ町での聞き取りのなかでも、曾祖父や曾祖母のことになると、「さあ、よく分からん」という方がけっこうおられました。しかも同時に、その方たちの意識のところでいいますと、Ｆ町に生まれ、Ｆ町に住んでいながら、Ｆ町へのわが町意識といいますか、定住意識といいますか、そんなものが、やはり他の被差別部落と比べるとかなり弱い、逆にいえば、仮住まい意識がかなり強い、ということであります。

この点については、系統的な意識調査がまだ行われていませんので、安易な一般化は慎まなければなりません。しかし、わたしたちの聞き取りの範囲では、たしかにそのようにいえると思います。げんに、Ｆ町の行政関係で長いあいだ、地区の人たちの世話をしてこられた方も、Ｆ町の人は地区への定着意識が弱い、反対に、仮住まい意識が強いというようなことを話しておられました。

実際に、Ｆ町のなかを歩けばすぐ分かることですが、Ｆ町は太田川放水路に沿った大きな地区なのですが、そこには、アパートやマンション、これらは県営、市営、公団など、持ち主はさまざまなのですが、それから借家がとても多いということであります。これらの建物に、外から多くの人たちが入って来た、いまも入ってきているということであります。反対に、昔からＦ町にいたと自称する人が非常に少ないということであります。そもそも、Ｆ町界隈の土地というのは、すぐ近隣の村に住んでいた百姓たちが持っていました。明治期に入って、広島に大量の人口流入が始まりました。Ｆ町周辺にもたくさんの人がやってきました。そこで、田畑をもっていた百姓たちが、借家や宿泊所を建て、後の時代にはアパートなどを建てて、借家業を始めました。その借家や宿泊所に、外から入った人たちが宿泊人となっていきました。そして、今日まで続くアパートやマンション、その一部は県営や市営や公団のものということにはなりましたが、それらになお新たな人が入ってきているわけです。このような住居の条件が、すでに明治期につくられて、今日に至っているわけです。このような事情もまた、Ｆ町の人たちの定住意識に大きく影響しているのだと思います。このあたりの具体的な数字については、今日は控えさせていただきたいと

思います。

ただ、定住意識の問題に関わって、もうひとこといわせていただきます。Ｆ町では、姓といいますか、ファミリー・ネームといいますか、青木とか、小林とか、加藤とか、そういったものの数が非常に多いということであります。これも、わたしたちの聞き取りや、先ほどの行政関係で仕事をしてきた方の話で分かったことなのですが。ここからも、Ｆ町の人たちが、広島近郊のあちこちの、さまざまな地域からやってきた人たちなのだということが分かります。これも、近代の都市部落の特徴といえると思います。

ところで、このようなＦ町について、わたしたちの調査で、とくに焦点を当てたのが、Ｆ町に住む人たちの生計・なりわいと仕事、そして労働力の構成についてであります。明治期以降、Ｆ町の人たちはどのようなかたちで糊口を凌いできたのか、という問題であります。そこではじめに、この経緯を要約しておけば、次のようにいえるかと思います。はじめ、明治期に、広島近郊の農村や漁村、小さな町などから、まず貧しい人たちが都市・広島に入ってきました。その一部が、Ｆ町に入りました。そして、人口が膨脹していき、いろんな下層の仕事が現われ、それらの仕事に、それらの人たちが就いていきました。そして、大正期、昭和期と進み、原爆投下に遭遇していくことになります。Ｆ町も、原爆によってほとんど壊滅的な状態になりました。そして戦後期、原爆の直後から、Ｆ町や太田川の河川敷に、たくさんの戦災罹災者や復員者、その他の困窮者が入り込んできました。さらに大雑把な話ですけれども、高度経済成長期以後、労働市場の変容とともに多くの不安定就労の人たちが生み出されていきます。そういう不安定就労の人たちが、これは現在も進行中の話なのですが、Ｆ町へ入り込んできます。つまり、明治期以降の一二〇年ほどのあいだの、Ｆ町の人口動態と、その人たちの就労傾向は、大きく、このような三段階を踏んでいるということであります。

広島の都市の産業構造と労働市場が、歴史の転換とともに大きく転換していきます。その転換の節目節目に、生活に困窮した人たちが広島に入ってきて、その一部がＦ町に入ってきたというか、吹き寄せられてきたというか、はたまた隔離されてきたというか、そういうかたちで、Ｆ町が都市の下層労働市場として機能してきたと、こういうことであります。

明治や大正の時代に、広島市内のあちこちに、当時でいう貧民窟、つまりスラムがありました。Ｆ町もその一つでした。スラムはなにもＦ町だけではありませんでした。明治期

の史料によりますと、Ｆ町の人たちは、明日のご飯にもこと欠く人たちが多かった、その人たちの仕事といえば、屠夫、屠夫というのは、屠場で働く人のことです、それから車夫、車夫というのは、人力車を引く人のことです、それから物売り、土方、職人など、当時も稼ぎの少ない、いわば下層の仕事がほとんどだった、とあります。これも史料によりますと、一九一二年つまり大正元年に、Ｆ町に人力車夫が一五〇人いた、とあります。当時の広島市全体に人力車夫がおよそ五〇〇人いた、といわれます。としますと、人力車夫の数は、Ｆ町には、かなり多かったとことになります。

さらに明治期との関わりでいいますと、都市・広島の近代というのは、広島が軍都として形成されたという事実を抜きには語れないということであります。今日、被爆の問題を語る場合も、とくに朝鮮人被爆者のことを語る場合には、そもそも広島が軍都であったという観点を抜きにしてはならないということが、いわば常識としていわれております。　ところで、問題は、広島が軍都として形成されていく、その過程で、広島の労働市場の下層部分を担っていた人たち、そのなかにはＦ町の人たちも入るわけですけれども、その人たちが、軍都の形成に関わるさまざまな軍需の仕事に雇用されて、働いて、生活の資を得ていたという事実であります。

広島には陸軍の第六師団が置かれていました。大正期の史料によりますと、陸軍は、広島中心部の土地の四二パーセントを軍用地として接収していたといわれます。軍が、都市の中心地でこれほど多くの土地を接収していたというのは、全国でも広島くらいなものでしょう。

そういうことで、広島の都市計画は、軍部主導で行なわれていきます。その結果、とくに上水道や下水道、電気、道路、線路、港湾、これは宇品港の開発のことですが、これらインフラの整備は、広島は、日本の都市でも早い時期に工事が着手され、完成されたといわれます。これらすべて、軍事目的のゆえのことでした。

ところで、これらの大規模な工事には、大量の労働力が必要になります。まずは、土方が必要になります。その他、土木工事だけでなく、いろんな軍需の仕事に労働者が必要になってきます。ちょうどいま、ある必要があって、図書館で『藝備日日新聞』という戦前の新聞を見ているところですが、大正期から昭和期にかけて、「土方求む」というような、軍の募集記事がいくつも出ております。そういう状況であったわけです。

そういうなかで、土方の仕事に、Ｆ町の人たちも、たくさん就労していきました。これ

が、Ｆ町の人たちと軍との関わりの一番目のことがらであります。

そしてもう一つ、軍との関わりで、軍は糧秣廠という、兵士のための食料調達の施設というか、工場をもっておりました。これはわたしも驚いたことなのですが、当時、中国大陸や朝鮮半島に兵士が送られていきましたが、それらの兵士が全国から広島に送られ、宇品港から出ていったそうです。その意味で、広島は、まさしくアジア侵略の、日本の出口だったということであります。ところで、その兵士たちの「戦地」での食料、これを調達したのが糧秣廠でした。

そこでは、兵士のための保存食として、肉の缶詰が大量につくられました。広島市内にも、肉の缶詰をつくる大きな会社がいくつもできました。そして、その肉の缶詰づくりに、Ｆ町の人たちが関わっていったということであります。

それから最後に、軍靴や軍隊用の皮革製品であります。これは、軍の被服廠でまかなわれたということであります。これら軍靴や皮革製品の仕事にも、Ｆ町の人たちがたくさん関わったということであります。

これが、Ｆ町の人たちの軍との関わりの大筋であります。Ｆ町の人たちは、この他、先ほどいいましたような、土方をはじめ、さまざまな下層の仕事に携わっていきました。Ｆ町の人たちは、当時の労働力市場の下層部分を担う一大勢力をなしたということであります。このような、食肉や皮革に関わる仕事を、Ｆ町の場合、部落産業と呼んでいいのかどうか、もう少し検討を要するとは思うのですが、ともかく、それらの仕事は、軍需に依存するところが大きかったということであります。ある史料に、一九三五年、つまり昭和一〇年に、Ｆ町に靴職人が二二一人いたという記録があります。この年、この人たちが、靴職人の組合をつくったということであります。この人たちが、軍から古靴を払い下げてもらって、それを修理してまた納める、あるいは靴屋で売るということをしたそうです。

それと、これは靴とは関係ない話なのですが、Ｆ町の人たちは、軍の残飯ですね、残飯といっても兵士が食べ残したというものではなくて、大きな釜でご飯を炊いて、釜に残ったご飯を払い下げてもらうこともしたそうです。また、Ｆ町の人が、近所の農家から稲の藁を集めてくる、その藁を軍に納める、軍はその藁を軍馬の飼料にしたり、下に敷いたりする、それから次に、下に敷いた藁が、馬の糞でまみれる、そのまみれた藁を、今度はＦ町近辺の農家に配る。こういうかたちで、日銭を稼ぐこともしたそうです。

このように、Ｆ町の人たちと軍との関係はいろいろありました。もちろん、Ｆ町の人た

ちの仕事がすべて軍需関係というわけではありません。やはり基本は、もっと広い意味での、都市・広島の形成のなかで生み出された、土方をはじめ、いろんな仕事に就いてなりわいを立てていたということだと思います。

非常に大雑把な説明でしたけれども、明治・大正・昭和初期には、Ｆ町の人たちの仕事は、おおよそこのような実態であったとのだと思います。

それから次に、戦後について、ひとこと触れておかなければなりません。

一つは、原爆のことであります。先ほどもいいましたように、Ｆ町は、原爆でほとんど壊滅的な状態になりました。原爆が落ちて、Ｆ町のたくさんの人たちが、太田川の河川敷に避難していきました。太田川の河川敷というのは、すでに戦前の段階で、洪水が出るたびに多くの被害が出るということで、河川の改修工事の方針が決まり、国がその界隈の土地を買い上げておりました。その買い上げ手続きは、戦前にすべて終わっておりました。ところが、戦争が激しくなるにつれて、改修工事などやっている余裕はないということで、一九四二年のことですが、工事が中断されていきます。それで、それらの土地がそのまま空き地になりました。戦争中は、食糧自給ということで、畑になっていたそうです。ところが、そこへ原爆です。Ｆ町の人たちが、そこへ避難していきます。同時に、Ｆ町の人たちだけでなく、いろんな人たちが流入していきます。原爆の罹災者とか、復員者とか、その他の困窮者たちであります。なかでも特徴的なのは、少なからぬ朝鮮人が入ってきたということであります。朝鮮人は、祖国が解放されて、宇品から船で祖国に帰るつもりで、近隣から広島に出てきた人たちでした。結局、いろんな事情のもとで、相当部分の人たちが、祖国に帰ることができず、広島に留まることになりました。これが、戦後の広島の在日朝鮮人の経緯の一つだといわれます。

河川敷は広大な土地で、しかも国有地で、たくさんの人が集住することができました。その結果、河川敷に大きなバラック街ができていきます。わたしが広島に来たのは、一九七四年でしたが、そのころ、いまの市民球場の周辺の河川敷の一帯に、まだバラックが残っておりました。市民球場のすぐ近くの相生橋から、河川敷に沿って北へ三〇〇メートルほどの一帯が、当時「原爆スラム」などと呼ばれていた地域であります。Ｆ町はそれより南に位置しますが、ともかく、河川敷にバラックが延々と連なっていたそうです。

その後、広島は、戦後復興の都市計画を実施していきます。その過程で、全市に散在していたスラムやバラック街、闇市が、クリアランスされていきます。そして、追い出され

て行き場のない一部の人たちがまた、Ｆ町隣りの河川敷に入ってきます。こうして、太田川の河川敷一帯が、いろんな事情を抱えた貧しい人たちの巨大な居住地となっていきます。

そして、一九五〇年代、この河川敷自体がクリアランスの対象になっていきます。Ｆ町では、それに抵抗して居住権を獲得するという、太田川闘争が展開されていきます。ただ、今日は、就労の話が焦点ですので、この闘争の経緯にくわしく立ち入ることはできません。

ところで、この戦争直後の時期、Ｆ町の人たちは、どのような仕事でなりわいを支えていたのでしょうか。

当時の史料によりますと、ここでは数字までは掲げませんが、一つは靴関係の仕事、それから食肉関係の仕事、さらに販売、これはおもに食肉の流通に関わる仕事、また工員、最後に日雇といった仕事が、Ｆ町の人たちが就いていたおもな仕事として挙げられております。とりわけ、いまはもうなくなりましたけれども、失業対策事業への就労が、大きな比重を占めていたようです。戦後の失対事業は、労働市場の下層部分においては、大きな役割を果たしていたといわれ、広島の場合もその例に漏れませんでした。そしてそのなかでも、Ｆ町の人びとにとっての比重は大きかったようです。そして最後に、Ｆ町の人たちの生計を支えていたものは、生活保護であります。

一九四〇年代～五〇年代のＦ町の人たちのなりわいの全体は、おおよそこのようなものでした。一九五〇年の広島市の調査によりますと、Ｆ町の人たちの仕事は、一つは、靴および食肉関係の職種。二つは、工員および店員関係の職種。三つは、日雇および失業と生活保護の関係。これらが、およそ三分の一ずつくらいの割合だったという数字が出ております。いずれも、零細な仕事や、わずかな稼ぎでしかなかったことが、推測されます。

ここで、いわゆる部落産業といわれる仕事の分野が、Ｆ町の場合、どうであったかについて、一言触れて起きたいと思います。

広島の場合、屠場が、全国に先駆けて、すでに明治期に、市内に散在していた中小の屠場を統合して、市営となりました。この背後にも、軍の意図を窺うことができると思います。その点はさておくとして、広島が近代都市として成長していくにともなって、食肉習慣が民衆のあいだに定着するとか、軍関係の皮革に対する需要が増えていくとかのなかで、食肉や皮革の仕事が繁盛して、そのなかで財を築く人が現われていきます。つまり、Ｆ町の人たちのなかに階層分化が生じていきます。この点も、Ｆ町の人たちの就労と生計をみるとき、欠くことのできない一面であります。

ところが、とくに靴産業についていいますと、これは全国的にもいえることですが、一九六〇年代に、靴関係の会社が大資本によって急速に系列化ないし吸収されていきます。Ｆ町の場合も、靴職人はたくさんいたのですが、すべて零細な規模の会社や工場、仕事場で、製造から販売を一手に扱うというような大会社はありませんでした。そのため、このころ、関西、とくに大阪や姫路辺りの大きな会社が、製造工程の機械化をはかったり、販売過程の吸収・統合をはかるなどして、合理化と資本集中を行なっていきます。そして、このような企業ないし資本に、Ｆ町の靴製造が巻き込まれていきます。それまでは、仕事場や作業場でコツコツと靴をつくっていたのが、一九六〇年頃から、関西方面から、なめした革が送られてきて、その革を裁断したり、靴の半製品が送られてきて、それを完成品にし、関西方面に送り返して、職人はその工賃を受け取るということになっていきます。とはいっても、Ｆ町に大きな工場ができたということではありませんが。

そして最後には、その仕事さえ減っていきます、あるいは工賃が低落していきます。このような靴産業の変容というか、衰退のなかで、靴の仕事ではとても食えないし、将来の見込みもないということで、靴職人だった人たちが転職をよぎなくされていきます。そしてＦ町では、つい先年、最後の職人が廃業していかれました。私たちは幸いにも、この方の話を聞くことができました。

職人たちの転職先は、聞き取り調査によりますと、大きく、二つありました。一つは、当時比較的若かった人、二〇代、三〇代の人。この人たちの多くは、土方、つまり建設労働者になっていきました。二つは、少し年齢が上の世代の職人たちは、公務員の現業職になっていきました。現業職といっても、実際にその仕事に就けた人の数は多くはなかったようですが、実際、私たちが聞き取りをお願いした方たちのなかに現業職の人が何人かおられて、その方たちの経歴も、おおよそいまいったようなものでした。逆にいえば、Ｆ町の人で、現在公務員をやっておられて定年間近かか、近年に定年となった人たちは、ほとんどといっていいくらい、一九六〇年代の前半から半ばにかけて、靴関係の仕事から転職した人たちだということです。

このような経緯があって、Ｆ町の人たちの就労構造は、高度経済成長期に連なり、今日に至っています。この過程で、Ｆ町の人たちの職業階層が分化していきます。それは、広島市の産業構造の変化に対応したものでもあります。経済的な階層も、分化していきます。具体的に、Ｆ町の人たちに、会社員であるとか、現業職ではない公務員、さらには自由業

の専門職の人たちが増えていきます。

しかし、これは国勢調査の結果からいえることですが、他方では、不安定就労層といわれる、日雇であるとか、臨時雇いであるとか、パートであるとか、要するに常雇でない、賃金や労働時間や雇用契約において不安定な就労状態にある人が、広島市の平均よりもあきらかに多い傾向にあります。とりわけ、サービス業や飲食業、販売員、店員、日雇といった仕事に就く人の割合が相対的に多いという結果になっております。

さらに、Ｆ町の人たちの仕事の特徴をいくつか挙げますと、まず、屠場関係の職人であります。現在、屠場の職人は四〇数名いるそうですが、そのほとんどがＦ町出身の人だということです。食肉関係でいいますと、それ以外に、内蔵や骨関係の仕事に携わったり、食肉の卸や小売に関わったり、さらには飲食店の経営者・従業員に至るまで、食肉に関わる人は、相当に増えるのではないかと思います。

次に、建設関係の仕事であります。Ｆ町には、大きな会社から小さい会社に至るまで、結構、建設会社の事務所や飯場がめだちます。早朝には、仕事に出かける人たちが、事務所や飯場の前に集合します。夕方の飲食店は、酒を飲んだり、食事をしたりする、仕事帰りの人たちで混み合います。そのころ、Ｆ町は、日焼けした男たちの労働者の街という感じが漂います。

最後に、公務員の現業職関係であります。現業職といっても採用の枠は小さいので、近年ではＦ町出身の若者がその仕事に就くというのは、ほとんどできないという状態になりました。Ｆ町の外の大学出の人たちが、現業職に進出しているということです。

ともかく、現在、Ｆ町の人たちの仕事は、大きくいって、食肉関係、建設関係、現業職関係と、これら三つの仕事群から成っているといいいでしょう。そして、これらをベースとして、それ以外の仕事に就く人たちが現われて、その結果、Ｆ町の人たちの就労構造が、上層から中層へ、さらに下層へ、ますます分化していっております。なかには、食肉関係、建設関係、さらには自由業の専門職関係には、経済的に豊かな人も現われてきております。ただ、豊かな人たちといっても、ごく一部の人たちのことで、Ｆ町の底辺には、貧しく、慎ましやかに暮らしている人が、圧倒的に多いということであります。

高度経済成長期を過ぎて、Ｆ町には、先ほどいいました不安定就労層の人たちが、外からも少なからず入ってきました。Ｆ町の人口がもっとも多くなったのが、一九七五年で、八六四四人となっています。それが現在では、五〇〇〇人弱と、人口がどんどん減ってき

ております。

この人口の減少傾向には、いくつかの原因があると思います。一つは、経済の低成長期からバブル崩壊期に至って、とくに建設業にいちじるしいのですが、会社が倒産する、経営が縮小されるなどで、雇用の減少が続いたからであります。二つは、Ｆ町の人たちの、アパートやマンションという住居の構造からして、成長した若者たちが世帯分離して、Ｆ町の外へ引っ越していかざるをえないという事情であります。げんに、いま、広島市の中心地に位置するＦ町で、老齢人口、しかも一人住まいの老齢者が急増するという、過疎化の現象が進行しております。

以上、時間の制約がありましたが、Ｆ町の人口と就労に焦点を当てて、明治期から今日までの経緯と特徴をひとわたり話してきました。Ｆ町の人たちが、近代から現代の、それぞれの時代に、どのようになりわいを支えてきたのか。どのような暮らしをしてきたのか。そして、Ｆ町の経済・社会構造はどのように変わってきたのか。こうしたことの、ほんの表面をなぞっただけでした。

ということで、ここで、これまでの話をまとめておきたいと思います。

一つは、広島が近代都市、さらに現代都市へと膨脹し、変容していくなかで、流動する人口の、その下層の部分の人たちを、いつの時代も、Ｆ町が引き受け、吸収してきたということであります。このことは、居住の条件および就労状況の点から理解することができます。まず、居住の条件であります。Ｆ町には、借り賃が比較的安いアパートや借家がたくさんあって、そこへ困窮した人たちが外から入ったという経緯であります。次に、労働市場であります。つまり、Ｆ町には、参入しやすい仕事が多かったということであります。これはとくに、建設業についていえます。建設業の日雇仕事であります。建設業は、景気の循環に大きく左右される産業であります。高度経済成長期と、その後のバブル経済期には、建設業が急成長しました。建設業は、公共投資という梃子を以て、日本経済の景気と雇用の調節弁の役割を果たしてきました。その一つの小さな現象が、ここＦ町でも確実にみられたということであります。

先にもみましたように、明治や大正の時代には、Ｆ町の人たちは、食肉、靴、皮革などの仕事であるとか、あるいは人力車夫であるとか、路上での物売りであるとか、清掃人であるとか、それらもろもろの仕事に就いた人たち、経済学ではそれらの仕事を「都市雑業」

などと呼んでいますが、そのような仕事に就いておりました。次に、戦後すぐの時代には、失業対策事業であるとか、失業であるとか、それに生活保護であるとか、このような状態の人たちがＦ町の大きな特徴でした。そして今日、先ほどみたような、食肉、建設、現業職といった仕事に就く人たちが、中心をなしております。

以上の事実から、二つのことが指摘できると思います。一つは、Ｆ町の人たちの仕事をみるとき、広島の産業や経済の変容の節目節目において、下層の、しかしもっとも必要とされ、活力に満ちた労働力部分を、つねにＦ町が広島の労働市場に供給していたということであります。二つは、このなかで、やはり多かったのは、都市雑業、それに失業と生活保護だったということであります。換言するならば、このようなかたちで、Ｆ町は、広島の都市経済の労働力の調節機能を果たしてきたわけであります。

経済学でいうならば、過剰労働力、とくにそのなかの流動的過剰労働力ということになりますが、まさしくこれは、日本の近代都市の形成そのものが、このような労働力によって根幹を支えられてきたということであります。そしてその場合、被差別部落が、その重要な一角を担ってきたということであります。今日取り上げましたＦ町の事例からも、このことがはっきり指摘できると思います。

一般に、過剰労働力とか、下層労働力とかいいますと、なにか消極的な意味合いしか持たないいい方のように聞こえますが、それは違います。それらは、たとえば大きな土木工事であるとか、軍需産業であるとか、今日のサービス産業であるとか、都市経済の転換期に大量に必要とされてきた労働力であります。この積極面もまた、Ｆ町の事例からはっきり指摘できると思います。

さて、今日の話の結論に行くまえに、Ｆ町の今日の状況について、もうひとこと、補足しておかなければなりません。

その一つは、いま進行しています、Ｆ町の人口の減少についてであります。先ほどもいいましたように、現在、Ｆ町の人口は少しずつ減っていっております。一九九一年には、四九七六人で、ひと頃の六〇〇〇人台から、五〇〇〇人台を経て、四〇〇〇人台にまで落ち込んでおります。現在、世帯数でいえば、二〇三〇であります。一九九五年の国勢調査によりますと、人口はさらに減っております。四四〇〇人から四五〇〇人台であります。Ｆ町の人口減少が、加速化しているようにも思われます。

この原因で、一番大きいものは、やはり景気の問題であります。とくに建設業を中心として、産業活動全般の後退であります。これが雇用を減退させ、その結果、建設業への依存度が大きいＦ町の労働人口に、とくに大きく影響したということであります。

もう一つは、Ｆ町の人たちの階層分化についてであります。Ｆ町の、階層的に上層に位置づく人たちが、まずＦ町の外へ転宅していきました。次いで、中流階級の人たち、これも層としてそれ程厚いわけではありませんが、その人たちが転宅していきつつあります。職場がＦ町のなかにある場合は、その人たちは、外からＦ町に通ってくるというかたちになります。

さらに、若い層がＦ町の外へ出ていっていることであります。この原因は、先ほどもいいましたように、家屋の構造にあります。アパートや借家に住んでいて、子どもが大きくなったとき、子どもの部屋が確保できないわけです。また、結婚などをして、親の世帯と分離しても、Ｆ町のなかに新しい住居を確保することができないわけです。このようなＦ町の住居の条件が、若者たちをＦ町の外へ追いやることになっております。

しかし、若者たちがＦ町から出ていくといったところで、これも人口調査の結果からいえることなのですが、ほとんどの若者は、Ｆ町から遠くない、同じ区内に移住するかたちになっております。同じ区内を超えて出ていかないわけです。この事実も、おそらく差別の脈絡で解釈できるのかもしれません。しかし、ここでは、その点には立ち入りません。

さて、こうして、Ｆ町に、老人の人口比率が高まるという結果になっていきます。つまり、アパートなどに老人が取り残されていったからであります。一九九〇年の数字ですが、Ｆ町の一人住まいの率が、なんと三六・三パーセントに達しております。この数字の多くは、老人であります。広島市の真ん中のＦ町で、山村にも等しい過疎化が進行している。これが、住居条件からするＦ町の実態であります。

現在のＦ町は、貧相な家屋が減って、マンションが建って、道路が整備されて、というように、地域景観はどんどん変わっていっております。Ｆ町の物理的な環境は、改善されてきました。とはいえ、ここにはまだ、二つの問題があります。一つ、物理的な環境が改善されてきたとはいっても、住居の条件にみましたように、今日しばしばいわれる生活の質という点でみますと、まだまだ問題が多いということであります。二つ、物理的な環境の条件云々の問題の背後には、目に見えない、貧しい生活の構造が、まだ存続しているということであります。今日は、それを就労という点についてだけみたわけですが、そこか

らも、Ｆ町の貧困の顔が浮かび上がってきました。ちなみに、ある文献によりますと、少し古い数字ですが、一九八七年に、Ｆ町の生活保護世帯率が、広島市全体のおよそ九倍であったといいます。二〇〇一年の現在、この数字はどう変わっているのでしょうか。残念ながら、資料が入手できなくて、推測の粋を出ないのですが、いろんな条件の変化を考えても、なお実態としては、それほど変わっていないのではないでしょうか。また、これも数字を挙げることはできませんが、たとえば高校や大学の進学率でも、格差が小さくないように思います。私がつきあっている身近かな若者でいっても、大学に進学した人というのは、一〇人に三人いるかどうかというところです。皆さんご存知のように、大学進学率の全国平均は、五〇パーセント近くです。個人的な印象論でしかありませんが、格差がはっきりしているようには思います。

今日は、Ｆ町に例を取って、人口と就労の、近代から現代に至る変遷について概観してきました。要するに、そこにはやはり、被差別部落に対する構造的な差別が作用している、Ｆ町の実態は、そう解釈せざるをえない、これが、これまでの話の結論だといいたいのであります。Ｆ町の実態の変遷をもっとくわしく、数字をも掲げて辿りたかったのですが、時間の制約と史料の制約とでそれが適わず、残念に思います。

それで、あと残った時間で、Ｆ町の人たちは、近代・現代の生計・生活環境のなかで、どのように生きてきたのかということについて、ひとこと、付け加えたいと思います。それは、換言するならば、Ｆ町の人たちは、困窮と被差別の境遇に置かれて、その境遇のなかでどのようにがんばり、境遇をどのように乗り越えようとしてきたのか、ということであります。それは、差別とどのように闘ってきたのか、という問いともなります。ここで、闘うといっても、なにもせまい意味での、解放運動で闘うということだけではなく、たとえば晩御飯を食べながら、「賃金が安いが、何とかならんかのう」というようなグチから始まる、家庭や、職場や、食堂での日常の会話をも含めて、わたしは、生活の積極的な意味を獲得するための闘いであると考えております。つまり、そのようなＦ町の人たちの言葉や行動の全体から、なにがみえるかということであります。もちろん、ここでその全体を話すことなど、とうてい不可能なことであります。ここではただ、差別に抗する解放運動、生活改善のための解放運動という点にかぎって、しかもそのごく一部だけを取り上げて、Ｆ町の人たちの闘いの意味を探ることができるだけであります。

一般に、目に見える差別というものは、とくに戦前において、非常に露骨なかたちで、日常茶飯事であるかのごとく頻発していたようです。たとえば先の『藝備日日新聞』であるとか、戦前の『中國新聞』であるとかをみますと、あれこれと、当時の部落差別に関わる記事が掲載されておりますが、その記事の書き方でさえもが、今日の常識からすれば、たまげるほどの差別的な書き方で、もろに賤称語を用いて書かれているわけです。そしてまた、その内容の書き方がひどいわけです。ということなのですが、記事の差別性については、いまは横に置くとして、記事には、もろに固有名詞を用いて、Ｆ町の人にこんな「事件」があって、こんな展開があって、こんな結果になったという経緯が、それはくわしく書かれています。こんな発言があったとか、こんなトラブルがあったとか、というような、あたかもひとの恥部を暴露するかのような調子でです。しかし、それらの差別的な記事から、最小限度の、出来事をめぐる具体的な事実の展開を読みとることができます。そこから、明治期・大正期の、部落差別の実態の、少なくとも氷山の一角を窺い知ることができます。そして、差別がいかに厳しかったかということを、これでもか、これでもかと、心に刻み込むことになります。

このような被差別の境遇のなかで、Ｆ町の人たちは、まず一九〇七年に、自生的なというか、地域の自立のためというか、住民組織をつくりあげました。これは、全国のいろんな被差別部落でもみられた、水平社運動以前の段階の住民組織と同じような、一例といえると思います。その組織は、Ｆ町で起こった大火がきっかけとなってできたものですが、ともかく自分たちの暮らしをなんとか守りたいという、住民の思いを組織するかたちで、上から、つまり権力の肝煎りでつくられました。げんに、その組織の歴代の会長は、警察署長でした。それは、典型的な融和主義の組織でした。

ただ、融和主義的な組織であるといっても、その評価については慎重でなければならないと思います。それは、上からつくられた、半分は官制の組織で、厳密には解放組織といえるのかどうかさえ、検討を要するところでしょう。しかし、当時のＦ町の人たちからすれば、自分の生活の不満とか差別に対する怒りとか、そういうものを表現する場が、そこにしかなかった、というのも事実であります。それを権力がどのように解消させていったのかは、また別の問題であります。その組織の機関紙や、他の記録などを読みますと、その組織の、実際の地域活動や反差別の活動には、当時の時点においては、無視しがたいものがあったようです。

それから、一九一八年に米騒動が起こりました。広島でも大きな騒動が起こっております。三〇〇〇人ほどの人が、市内の米屋に談判というか、強要というか、要するに、米価を下げろと押しかけたわけです。広島では、市内の東部と西部の両方で、別個に米騒動が起きたそうです。その西部の方の騒動において、Ｆ町の人たちが中心的な役割を果たしたと、新聞や史料にはあります。つまり、騒動の最初の日の夜に、Ｆ町の一角に四〇〇人ほどの人が集まって、米価を下げろと、抗議の声を挙げたということです。それほどに、Ｆ町の人たちの生活は逼迫していたということですが、この米騒動の全体の過程、そこでのＦ町の人たちの位置や役割については、さらにくわしい検証が必要ではないかと思っております。

米騒動の数年後、すなわち一九二二年に、京都で全国水平社が結成されます。そして翌年に、広島県水平社が結成されます。その事務所が、Ｆ町に置かれました。市内の劇場を会場に、創立大会が行なわれたのですが、その会場をめざして、Ｆ町の若者たちが、先頭の者が馬に跨って、黒色の荊冠旗を掲げて、隊列を組んで、シュプレヒコールをあげながら、示威行進をしたということです。行進の両側を、官憲にはさまれての行進でした。幸運にも、私たちは、その時その場にいた老人から話を伺うことができました。そのころ、水平社をつくって世の中を変えるんだ、いやかならず変わるんだと、だれもが、それは熱い想いに燃え立ったといいます。若者たちは、「われを差別するなかれ、しからずんば死を与えよ」と、決死の想いで、差別と闘ったといいます。水平社の闘い、とくに糾弾闘争が、厳しい弾圧のなかで、果敢に繰り広げられていきました。

とくに一九二七年には、広島で、第六回水平社全国大会が開催されます。当時、水平社のなかでは、マルクス主義者とアナーキストのあいだで、路線の対立が激しく、水平社解消論まで出るなど、組織に大きな亀裂が入って、分裂しかねない状態でした。それを、広島で全国大会を成功させることで、組織の分裂を回避して、団結を固めようということで、県水平社の人たちががんばって、大会の開催にこぎつけたそうです。その県水平社のなかで、Ｆ町の人たちも大きな活躍をしたそうです。そして、大会を成功させていきました。このようなＦ町の人たちの闘いに接するとき、わたしの心は踊ります。

次に、戦後の闘いについて、ひとこと、触れておきたいと思います。先ほどいいましたように、Ｆ町も、原爆によって壊滅的な被害を被りました。そのうえ、原爆の被害の只中でさえ、差別の脈絡でしか解釈できないような事実が、あれこれあったようです。わたし

が史料や記録を読むことのできた範囲で知った事実でありますが、まず、子どもの爆死者が、Ｆ町では多かったといいます。どの史料も数字を掲げていないので、また、人数まではおそらく不可能なことなのでしょうが、正確に知ることができなくて、残念なのですが。どうして子どもの被爆死が多かったかといえば、戦時中、Ｆ町の子どもには、市外へ疎開する機会が少なかったという事情があったということです。

次に、原爆の爆心点からＦ町までは、二・五キロほど離れております。しかし、家屋の倒壊や炎上、人的被害など、Ｆ町の被災度は、爆心点により近い町よりも大きかったといいます。これが事実であるとすれば、差別の脈絡でしか解釈できない事実のように思われます。

原爆が落ちて、Ｆ町の人たちは、およそ半分が市外へ避難して、残り半分が太田川の河川敷に避難したといいます。河川敷といっても、Ｆ町のすぐ隣りの土地のことであります。また、市外へ避難した人のおよそ半分が、半年以内にＦ町へ戻ってきたといいます。いずれも、体験者や被爆者の会関係の証言や記録によるものです。いまのところ、これ以上の事実は分からないのですが、それでも、Ｆ町の人たちの避難の仕方、Ｆ町への戻り方からは、原爆の地獄のなかでさえ、厳しい差別の現実を思わせるものが少なからずあります。子どもの被爆死が多かったという話と関連して、Ｆ町の人たちには、やはり被爆後の避難先が少なかったということでしょうか。もしそうだとすれば、それも、差別の脈絡で解釈されるべきものだと思います。

このような被爆体験を経て、Ｆ町の人たちは、河川敷に住んでいきます。新たに外部から流入した人たちといっしょに、住んでいきます。そして、一九五〇年代に入って、太田川の改修工事、これは戦前にすでに一部始まっていたものですが、それを再開するということになります。河川敷からの立ち退き命令が出されて、それに対する反対闘争が起こっていきます。その闘いは、当時の部落解放全国委員会という運動組織の総がかりの支援のもと、Ｆ町ぐるみの闘いとして展開されます。そして、太田川闘争が終わったころ、今度は、百メートル道路の延長に関わって、Ｆ町の一角の立ち退き問題が起こります。そして、第二弾の居住権闘争が起きていきます。

残念ながら、これらの闘争について、これ以上くわしい話はできません。ただ、エピソードを、一つだけ紹介します。太田川改修で、国の建設事務所が強引に工事を始めようとしました。そのために、土を運ぶトロッコの線路が敷かれました。そのとき、Ｆ町の人た

ちが、線路の上に座り込んで、トロッコを阻止しました。座り込みは、一ケ月以上も続いたそうです。その最初の日に、一人のおばあさんが座り込みの先頭に回って、「あんたら若い者は、将来のある身じゃけ。わしゃ、この先どんだけ生きるか分からんのじゃけ。あんたらは下がってんさいや。死ぬのは年寄りでたくさんじゃけ。こんなかたちで死ねるんやったら、本望というもんじゃけ」といって、若者たちを押しのけたそうです。すごい話ですよね、これは。

Ｆ町の闘いは、解放運動の路線問題の煽りを受けて、その後、一時沈滞していきます。そして、一九九五年に、部落解放同盟のＦ支部ができていきます。この間のことについても、話したいことがいろいろあるのですが、今日は割愛せざるをえません。

こうしたＦ町の人たちの差別との闘いは、戦前から戦後を含めて、Ｆ町の生活環境なりその変容なりのなかで、厳密な意味での解放運動と呼べるかどうかはともかく、ずっと続いてきました。差別に対して、ただ黙っていた時代は一度もなかった。Ｆ町の人たちの足跡を勉強して、そのような感想を強く抱くわけであります。やはり人間というものは、生計を支えるというだけでなく、生計を支えるためにがんばる、その意味というものをたえず求めずにはおれない存在なのだと思います。それは、本質的に、被差別の立場の人であろうとなかろうと、同じことだと思います。ただ、Ｆ町の人たちの生きる闘いのなかに、その姿をはっきりと見ることができる、そして自分にとって生きる意味というものを諭してくれる、このように思うのです。

最後に、差別の歴史は、差別との闘いとその弾圧の歴史でもあります。このことを、たとえば水平社の闘いなどから読みとることができます。先ほどいいましたような、「われを差別するなかれ、しからずんば死を与えよ」という気概に圧倒されますし、また、それほど差別も弾圧も厳しかったということでしょう。官憲に捕われようと、拷問を受けようと、意思を崩さない。これは、たんに勇気とか決意の問題ではないと思います。その意思の背後には、歴史を超えて伝わってくる思想というか、哲学の問題があるように思います。

今日の状況でも、部落解放運動はもとより、同和教育運動に対する弾圧が強まっております。そのことは、日々、教育の現場でがんばっておられる先生たちは、よくご存知のことだと思います。これは、部落とか、同和教育とかいうことに留まらず、まさに今日の人

間的状況そのものだと思います。こんなときこそ、わたしはどう生きるか、という問いが問われてくるのだと思います。わたしがＦ町の人たちの差別と闘いの歴史を学ぶのも、その答えをみつける、あるいは深めるためだと思います。

現在、Ｆ町で高校の先生たちを中心に、月一回、勉強会をしております。その先生たちは、ほとんどすべて、県教委の弾圧によって、職場を飛ばされたりしました。それは、陰湿な弾圧であります。もちろん、地域進出費のようなものも、いまは出ておりません。しかし、今年に入っても、その先生たち、勉強会に、だれ一人として欠ける人がおりません。わたしは、先生たちの、人間としての誠実さに感動しております。

近代史の勉強からいえることは、今日のような弾圧が強まる状況であれ、それは歴史の一駒にすぎないということであります。次には、やりかえす日がきっとくる。そのような歴史をみる目を以て、いまをしっかり生きていきたいと思います。

つたない話を聞いていただいて、ありがとうございました。Ｆ町の人たちの近代〜現代の足跡から、差別や闘いの意味について、多少のヒントなりとも得ていただければ、幸いに思います。

冒頭にいいましたように、わたしたちは、いま、Ｆ町の資料集をつくろうと思っております。二〇〇二年の三月の完成をめざしております。完成の折には、皆さんにはまた、よろしくお願いいたします。重ねて、ありがとうございました。